



## サンダーバード2号が三浦海岸に着陸 高床式多目的リゾートハウスが 作る趣味と実益の両立

細かく進化を繰り返しながら、20年に渡って構想されてきた、サンダーバード2号のようなリゾートハウスが、遂に東京からクルマで1時間の場所に出現します。自己使用&民泊ビジネスで充実のライフプランです。

一段高い視線で、波打ち際から水平線まで一望のリビングスペース。都会の喧騒を離れて、追いつけられないような時間感覚から離脱して、ゆっくり呼吸するような感覚を取り戻す場所。単なるリビングルームではない、ある意味での特別なスペース。外壁やガラス窓を定期的に、水道水の高圧洗浄ができるように設えておくことも大切な要素。

LIVING



CARAGE



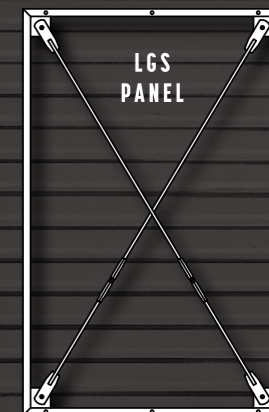
上部が吹き抜けになっているインナーガレージの内観イメージ。サーフボードはもちろん、SUP、シーカヤック、ウインドサーフィンなど大型ギアも余裕で格納できる天井の高さと取り回しの良さが持ち味。クルマやバイクの格納以外にも、海の見えるカフェとしてコミュニティスペースに転用するのもアリです。

Monthly Theme

デイトナが提案する  
新しい建築のカタチ

**DH L**  
DAYTONA HOUSE×LDK

CASE 48



70  
PANELS

What's DAYTONA HOUSE ?

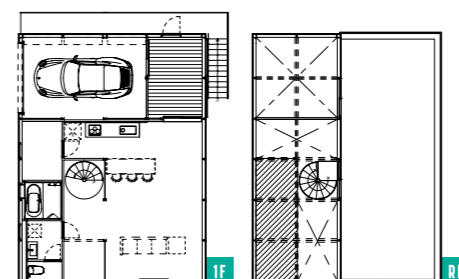
デイトナハウスを構成するのは、LGSと呼ばれる軽量鉄骨のパネルで、厚さ3.2mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅180cm、縦270cmの長方形に溶接して製作しています。対角線のクロスしたパーツは、「ブレース」と呼ばれる筋違いで、力の伝達を受け持つ大切な役割を持っています。「柱」と「梁」と呼ばれる縦と横の部材を使って軸組を作っていく一般的な建築とは違って、デイトナハウスはこのLGS パネルを連結することで住宅、ガレージ、別荘、店舗、マンションなどの様々な建築を可能とする、全く新しいカタチのシステムなのです。つまりこのLGS パネルを使った建物全てがデイトナハウスと言う訳です。パネルの枚数を数えるだけで、建築の広さ、およその予算がイメージできる分かります。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感が醸し出すハードボイルドな空間のテイストも持ち味です。

www.daytona-house.com

INFORMATION  
**LDKinc.**

代表: 玉田 敦士  
www.ldk.co.jp  
03-6228-4933

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社 LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。



FLOOR PLAN

高床式なのにガレージスペースを設置しているのがこのプランの特長。普段は断熱材付きのコンクリートパネルで作る床版も、ガレージ部分は、デッキプレート&コンクリート打設の必要性を想定しています。階段上のスペースは、すべて吹き抜けで屋上テラスに出る廊下のみを想定。高床式は確認申請上は、平屋建築が前提なのです。

デイトナハウスが着眼しているファクターの大切なコンセプトは、「自己の人生の充実」と、経営的発想の両立を可能にするライフスタイル創造装置としての建築です。今回ご紹介するのは、デイトナハウスが実際に設計中の、神奈川県三浦海岸に隣接するリゾートハウスです。少し高めの視線で、自然に対して一歩前に。先端に羽の付いた鋼管杭を利用したデイトナハウスオリジナルの高床式工法「スパイキーLGS」ならではの提案なのです。

この形は、そもそも20年前に老舗自動車雑誌「カーマガジン」の連載ページで着想していたものです。長い歳月を経て、建築工法や鉄骨製作技術も進化を重ね、ようやく実物を建築できるようになった喜びを是非、昔からの読者の方々と分かち合いたいような気持ちです。

この建物のイメージを見ながら改めて感じることは、デイトナハウスがご提案しているコンセプトは決して「借り物」ではないということです。パブルの頃は、地中海風や、イタリア風。がデザインの世界で跋扈していた時代でありました。時代を経て、それが今では、表装だけ真似をした「カリフォルニア風」という様に、借りてくる、場所の名前が変わっただけです。ここはあくまで日本で、このような表面的な拝借スタンスを、文芸評論家の小林秀雄は、様々な意匠について批判したのです。しかし、日本の建築技術者が長い年月格闘してきた技術のエッセンスを再編集して、この島国に暮らす、私たちらしい

建築、を地元の職人と作っていきたい。これがデイトナハウスの一貫した姿勢です。

新型コロナの蔓延で、それまで好き放題にはびこっていた、グローバルズム一辺倒に、少しだけ疑問符が付きました。この建物には是非、日本の豊かさの再発見装置としての機能も担ってもらいたいという祈りを込めています。

### カーマガで掲載した この建築模型がルーツ

かれこれ20年前、雑誌カーマガジンにLDKが連載していた「クルマ居住学」の一コマ。このころは、まだ杭基礎の「TP工法」という糸口が見つかっておらず、仮想プランとして発表していました。不動産価値体系に隷属する建築の現状を、今、コロナ後の人々の意識の変化が吹き飛ばしてくれようとしているかのようです。



Photo/Ken TAKAYANAGI Text/Atsushi TAMADA



## SPIKEY-LGS

地球環境にやさしい“浮遊感”

オリジナル工法「Spiky-LGS」を実感できる写真。先端羽根つき鋼管杭を高止まりにして、その上に鉄骨土台と本体を繋結する高床式工法。コンクリートを一切使わない、環境にも優しい工法でありつつ、群を抜いてスタイリッシュなものです。30度の斜面でも施工可能。まさに密から疎にリビングシフトするだろうと言われるアフターコロナ時代にピッタリな仕様です。



デイトナ不動産

## これぞ正統派のミッドセンチュリースタイル 遂にその全貌を現すTYPE-Fプロトタイプ

空中にふわりと浮かび上がったような“美しい平屋”のTYPE-Fが福島県に完成しました。

色々な意味で“アフターコロナ(withコロナ)”時代にピッタリな建築様式です。

日本が焼け野原だった第二次大戦(大東亜戦争)直後の1948年から1966年まで、アメリカの雑誌『*Architectural Record*』に連載された一連の実験的な住宅群、ケーススタディハウスをこぼしてしまおうか？

今に至るまで大切にされて現役の住宅として現存している、それぞれ独自の魅力を持った珠玉の住宅群です。生活を周辺の自然環境へと開放するその作法は、従来の西洋の建築の考え方は一線を画するものです。所謂、ミッドセンチュリースタイルとは、まさに大戦の後、謙虚になった人間の、祈りにも似た新しい建築の考え方を指す言葉であって、一過性の商業的な売り文句ではないとデイトナハウス×LDKは考えているのです。そして、その素晴らしい建築手法を法律の厳しい日本で蘇らせたという思いを、商品開発の原動力にしてきました。その結果ともいえる規格住宅がTYPE-Fなのです。

その特徴の第一は、ふわりと浮かび上がった高床式の外観です。先端に羽の付いた鋼管杭を測量機械を使いながら正確に鉛直に打ち込み、その上に鉄骨土台、建物本体鉄骨の順番で組み上げていく独特の工法を採用。細長い四角形の底辺まで視覚に入ることを感じる、浮遊感。ミッドセンチュリーデザインの極致ともいえるものです。また、コンクリートはほとんど使用することなく、過度な造成工事や掘削工事を必要としないため、何より地球にやさしく寄り添うような印象をもたらします。これにより、30度程度の斜面であれば、造成工事なしで建築することができ

るので。

特徴の第二は、ミッドセンチュリーの作法ともいえる表現手法、スルーを随所に援用していることです。例えば、ガラス一枚隔てて、屋内の天井の仕上げとバルコニーの底の仕上げの連続性を演出すること。これが、スルーです。この作法は、自然との、結果を明確にして自然と対峙する一般の西洋建築の自然観の対極に位置するもので、むしろ自然に溶け込むようなスタンスを表現しています。このような作法で作られたバルコニーは、むしろ和風建築の縁側のように、自然と人為の間に緩やかなバッファゾーンを構成します。これは人間関係の理想にも通底し、東洋的な道にも通じるものだと思います。震災以降、自然に対して「よそよそしく」ならざるを得ない福島の地で、改めて、自然と人間の関わり合いを表現した意匠性のTYPE-Fを建築できたことは、デイトナハウスにとって大変意義深いことだと感じ、建て主様の見識の深さにかけて感謝の念を禁じ得ません。

OWNER 白土栄一さん

SUPを中心としたアウトドアアクティビティをこよなく愛し、日本スタンドアップパドルボード協会の東北ブロック長も担当する白土さん。震災後、地元福島から離れていましたが、奥さんの後押しもあり昨年Uターン。生まれ育ったこの場所を整備し、このTYPE-Fを築き上げた。今後ここは、宿泊できて仲間が集うクラブハウスとして活用する予定となっています。



## EAVES

ミッドセンチュリーデザインは  
庇が決め手なのです

上裏の木板貼りがガラス一枚隔ててそのまま同一レベルでリビングの天井の板張りに連続していく“スルー”の技法。庇の見方はフックと引き締まる配色にして、なるべく細く設えます。この意匠的配慮によって、外部の自然との一体感をより鮮明に演出。バルコニーは言い換えれば“縁側”。実にうれしいバフファーズゾーンです。



## GARDEN

作庭は重要な部分です。現在、日本で庭を造る職人さんは一般には植木屋さんと呼ばれている人たちが、ミッドセンチュリー建築の場合、“人為”の反対物である自然を象徴的に表現するセンスが求められるのです。

HARVEST 0246-88-7895  
haves935@gmail.com



## INTERIOR 天井の鉄骨梁がアクセント 細かい工夫を散りばめた室内空間

和室の壁における規則的な柱(構造材)表面の露出。こういう壁を“真壁”といいます。お馴染みの和室の壁です。それと同じように天井に鉄骨梁表面が規則的に露出します。このリズム感がアクセントになって、飽きの来ない空間が現出するのです。天井を木板張りにし、一般にフローリングが多用される床が、タイル貼りにしています。



床に畳を敷いたゾーン。和室という考え方はなく、植物由来のオーガニックなフローティングフロア(取り換え可能)として、天然イグサの畳をフチなしで使用しています。

## GARAGE

螺旋階段とロフトがある  
ガレージの幸せ感

ガレージは単なるクルマの置き場としてではなく、様々な大型ギアが収納できるように工夫がされています。通常の鉄骨梁の上にもロフト空間を設定して、そこにはデイトナハウスオリジナルの螺旋階段で昇降するように設定。ガレージは高床式を採用せず、通常の基礎を持った独立した構造を持っています。



## PLAN

この住宅は、居住部分は3×8スパン(1スパンは約1820mm=1間=畳の長手の寸法)。ガレージは3×2スパンです。したがって、居住部分の面積は24坪。すなわち約80㎡。ガレージが6坪すなわち20㎡。トータル30坪の約100㎡の専有面積です。自然に対して開く意匠的な工夫やデッキスペースなどで、空間を実際の面積よりも豊かに感じる工夫がポイントといえます。

※このプランは写真のプロトタイプではなく、通常仕様となります。

